〝オイルブーム〟に湧き上がったわけである。仕事は建材に使う石の割り出しで、山から掘り出した巨石を石斧で直方体に切る力仕事。ノルマは一日に百個だった。カスピ海の水は塩分があって飲めず、遠くのオアシスから鉄道で運んで来る。のどが乾いて夜中に水を盗みに行っては看視兵に何度追いかけられたことか。

夏は酷暑華氏百度、冬は零下三十度、文字通り無味乾燥の砂漠地帯で、出稼ぎのウズベック人、カザフ人らと働いて丸三年、二十三年十月に舞鶴に帰還したが、上陸と同時に入院して一ヵ月。見舞いに来た家内の話で留守宅の状況を聞いて一安心したものの、病状は良くならず金沢の国立病院にまた入院一ヵ年、腐蝕した腎臓の片方を摘出、睾丸も片方抜かれ、その後また腎臓結石で苦しむなど傷痍軍人となったが、近年ようやく健康を回復して神明奉仕の日々を暮らすことができるようになった。

肝心の家内がとうとう昭和五十一年に脳血栓で倒れ、私が看護に当たる役割交代となったが、私の八年余の留守中はもとより、六人の子供を抱えて一家を守り通してくれた妻の愛情と執念は何度頭を下げても下げ足りない。繁忙の傍ら、地区の民生委員を三十年以上も務めてくれたが、昭和六十年遂にその生涯の幕を閉じた。〝母は強し〟の言葉をつくづく想うのである。

私の信念とする言葉は、神は人の敬によって威をまし、人は神の徳によって運を添う、ということである。残り少ない人生を悔いのないように一日一日を大切に、神明奉仕の精神を忘れずに暮らしてゆきたいと思っている。

抑留生活中での一こま

石川県　松本忠男

昭和十六年十二月地元高等工業学校を繰り上げ卒業し、民間企業に就職もつかの間、翌年二月一日、現役兵として東部第四九部隊（歩兵第七聯隊留守隊）に入隊。幸いに技術部幹部候補生に合格し、幹候教育修了後赴任したのが東京府中町（当時）にあった陸軍燃料

本部であった。ここで与えられた任務が、満州錦西市に建設中であった陸軍燃料製造所に、満州の大豆油より航空機や戦車に使う潤滑油を製造する設備の設計と建設であった。青年将校として報国の念に燃えて粉骨砕身、日夜若い血をたぎらせて働いたものであった。昭和二十年四月、既に敗色濃い時期であったが、ようやく建設の終わりかけた設備の試運転には設計担当者が出てこいとのことで、勇躍（？）渡満、現地に着いたのが四月。ところが内地からの資材は未着、現地での材料不足等々で試運転は遅れに遅れ、遂に八月の終戦を迎えてしまった。目的の挫折やこれからの日本の将来、親弟妹のことなどを思い無念の涙をとめどなく流したことを覚えている。

部隊の将校だけが軍人だったことにして進駐してきたソ連軍に名簿を提出し、設備もろともダワイされ、新京の収容所に一時収容された後、連れて行かれたのがはるばるウラル山脈を越えてモスクワ東南方三百五十キロメートル、マルシャンスク市郊外の収容所であった。渡満のときは予想もしなかった丸二年間の屈辱的抑留生活を強いられてしまった。今は既に五十余年を経て記憶は段々薄れているが、色々なことが思い出されるなかで特に印象に残っている一、二を取り上げてみたい。

木材運搬、草刈り、畑仕事等々、すべての作業には一日一人当たりのノルマがあり、それを一〇〇パーセント達成しないと給与が減らされる。どの作業にもチャサボーイ（警備兵）とともについて来て作業指揮をするナチャーニック（監督）がいてノルマが指示される。当初は日本人的考え方で、一日の作業量を早く仕上げてバラックに帰り、少しでも休養したいと思い頑張ってやると、半日少々で終わった。ところが、翌日はノルマを上げられてしまったのだ。こんなことを二、三日続けて、やっと与えられた仕事を一日の決まった労働時間内にゆっくりやれば良いことがわかり、その後は少しでも体力の消耗を避けてゆっくり時間いっぱいでやることを覚えたのである。種々の作業のノルマは細かい国家作業基準があるらしいが、我々にはわからない。作業監督が自分のノルマから算定して割

り出していたらしい。勤勉一途の日本人にはソ連人の大陸的作業感に当初は驚いてしまったのである。

その後『日本新聞』や収容所内のアクティブより「スタハノフ運動」なるものがあることを知らされた。社会主義競争の一環として一九三五年以来広く行われた生産性高揚運動で、ウクライナの炭坑夫スタハノフがあらゆる工夫をして高ノルマを達成し「労働英雄」の称号を受けたことを喧伝して、これにならって作業意欲を高めようとした運動で、こんなようなことでもしないとソ連人のノンビリした作業態度はなおらなかったのだろう。我々にも多少これにならって作業の尻たたきはあったもののあまり乗らなかった。

望郷の思いに明け暮れた収容所生活が一年ほどになって突然、「ウダルナヤローター（突撃中隊）」隊員募集があった。あらゆる難作業に率先従事し、ソ連邦の復興発展に寄与することを目的とする作業隊とのことで、ソ連の発展は米国に占領され反動の嵐吹き荒れる日本を救う途にもつながるとも言われた。そこで、二、三の友とひそかに話し合って、幸い体も元気で、これまでの作業から推して難作業と言っても大したことはなかろうし、入隊した者は我々の最も期待する〝帰国〟も早かろうと考えて入隊を志願した。六百人くらいの収容所人員の中から参加したのは約六十人。旧満軍の海和将校を隊長として別バラックに収容されウダルナヤローターの編成が終わった。収容所所長より早速訓示があり、お前達は多数の中から先んじて突撃隊を志願した英雄であると持ち上げられ、その後一遍に待遇が変わったのである。通常腕に巻いた腕章には「ВП（ベペ）」と記入されているが、突撃中隊員は「УВП（ウベペ）」と変わり、衣服の悪いものは取り換え支給され、収容所の出入りは無検査（これを悪用し、結構持ち出し、持ち込みをした）、月手当は日用品を買うため十ルーブル支給されていたものが、一挙に五倍の五十ルーブルとはね上がったのである。作業は確かに意識的に通常ノルマを超えてやったり、洪水の後始末など少々つらいこともあったが、それほど苦しいこともなく過ごして半年、農場で収穫作業中、待望の帰国命令を受けた。突撃中隊員は全員帰国

組に入り、残された者より半年早く二十二年十一月、秋色深い舞鶴港に感激の上陸を果たしたのであった。

翌年同じ収容所から帰還した人から聞いた話では、その後ウダルナヤ運動をどんどん浸透させられて収容所の大半がУВПとなったらしい。しかし我々第一回に応募した者に与えられたような特別待遇はなかったらしい。

蚤、虱に悩まされる暗い収容所生活の中で、月に一度くらいの入浴（？）と衣類の熱気消毒はまたとない楽しみの一つであった。湯舟があるわけでもなく、衣服を熱気消毒室にあずけて、桶に二杯（普通のバケツ二杯くらい）の湯をもらい、それを上手に使って体を洗い下着まで洗濯するというものであった。入浴のあとは熱気消毒のお蔭で一、二日は蚤などの襲撃から解放されて寝ることができた。もちろんこんな入浴（？）のあったのは収容所にいたときだけで、森林や農場では全くない話である。大平原の農場では、窪地に冬季の積雪が溶けてできた池があり、我々の寝起きするバラックもその傍らにあるのだが、一つの池は飲料炊事用、一つは入浴洗濯用、一つは馬の水飲み場と区分していた。女性のナチャーニックが時折下着だけで池に入り体を洗う姿を望見して男心をかきたてられたこともあった。

マルシャンスク収容所からの帰還の旅は往路と同じ貨車輸送の旅であったが、一般市民待遇ということでオムスク、トムスク、クラスノヤルスク、ノボシビルスク等、シベリア鉄道沿線の都会の駅では給水給炭、食料積み込み等の作業があるため、朝から晩まで停車することがあった。停車時間を利用して駅にある大衆共同浴場に入る機会があった。まずこの浴場に入ると待合室があり、入浴指示が出るのを待つことしばし、一回五十人くらいで区切り、次の脱衣室に進む。そこで高温消毒の衣類と低温消毒の革具類に区別して環に懸け、消毒室の受付窓口にわたすといよいよシャワー室に入ることになる。一人一人仕切りのあるシャワーは入室と同時に湯が出て、最初十分間はぬる目、次の二十分は熱目の湯に変わり、次の十分間は再び最初の低温の湯に変わる。ぬる目の湯が出だしたらシャワー

はそろそろ止まることがわかる。しかし、シャワーだけで四十分間はとても長くて、かかりっぱなしでいるわけにはゆかず、一時傍らにある木製腰掛けにかけて休みながら一緒に入浴したロシア人達の入浴状況を興味深く眺めていた。シャワーが止まると、次の室で消毒済み衣類を、はじめにもらった刻印入りメダルと交換で受領し、衣服を整えたところで次の室に入る。そこは休憩室で、ジュース等も売っており、長いシャワーでほてった体を休めることができた。一般市民には月一回くらい入浴券が出ているとも聞いたが、なかなかに合理的な流れ作業システムの浴場であると思った。入浴後は突撃中隊のときや帰還準備中に不要品を市民に売って作った小遣いの持ち合わせもあったので、駅前付近を見物したり、駅の売店でアイスクリームを買って食べたり、二年前の往路とは地獄と極楽の違いの旅だったことを覚えている。

運が良かったこと二つ

石川県　塩　由造

私は、戦前、鮮満大陸との連絡口の一つであった能登の七尾港の隣町、田鶴浜で生まれ、家業（神職）を継ぐべき長男でもなかったので、上京して武蔵野高等無線学校に学んだ。

昭和十（一九三五）年に卒業して渡満、延吉にあった間島省商工部に就職。無線通信の業務に就いたが、建国早々で治安は安定せず、ソ連領とも近いので反日的な共産匪の暗躍なども絶えず、関東軍や警察関係の秘密通信を扱うことも多かった。

大東亜戦争が勃発して省庁の日系役人は次々に召集されて仕事も激増、私も何度か召集されたものの、特殊任務ということで解除になっていた。二十年の六月に来た最後の「赤紙」で入隊したところはハルビンの近郊、阿城の第四二〇榴弾砲兵団で、長官は砲兵少将